

2 イネ主要病害の発生状況と対策

はじめに

病害の発生は気象条件に大きく左右される。このため年次変動が大きく、薬剤防除が不要であったという結果に終わる年も少なくはない。しかし、病害の防除は、発生をみてからでは十分な効果が得られないことから予防対策が求められる。どの程度の発生があるか、イネ主要病害の発生概要を紹介する。

いもち病

2003年の多発は記憶に新しい。この年は梅雨期に雨が長くしかも長引いたことと、箱施用剤に対する耐性菌が発生したことから多発生につながった。各年の7月下旬の発生状況をまとめたのが図1である。1993年、1997年の発生が著しく、次いで2002年、2003年に発生が多かった。本病の発生は地域差が大きく、'96、'97年は常発地である北部（但馬地域）の発生が目立つが、2001年以降になると北部よりも県東部（東播磨、摂津、丹波の一部）や西部（西播磨）の発生が多くなっている。南部（淡路地域）の発生は山間の一部である。

常発地である北部の発生が低下し、東部や西部で多くなっている要因を考察してみる。長期残効型箱施用剤のカルプロバミド剤とプロベナゾール剤が1998年に県防除指針に掲載され、特に本県ではカルプロバミド剤の普及率が高く、その防除効果は顕著で1999年から2001年までは発病株率が低く経過した。ところが2002年に西部を中心に発生が急増したため、耐性菌の検定を実施して急増の原因が耐性菌であることを明らかにした。耐性菌に対しては代替剤による防除効果が高く、大きな問題には至らずにすんでいる。

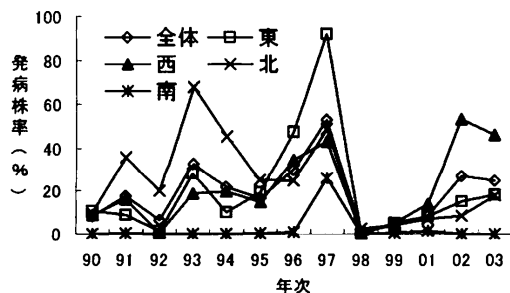


図1 いもち病発病株率

紋枯病

いもち病ほどの年次変動はなく、過去10年の平均発病株率（8月下旬）は7.2%で、上下約5%の幅で推移している。東部、西部でやや高く、北部・南部はやや低い。本病は、栽植密度よりも株当たり茎数が発病に影響する。東部・西部では耐倒伏性に優るキヌヒカリ・ヒノヒカリの作付が多く、多収をねらった多肥栽培の傾向から株張りがよくなり、茎数が増えるため発病に結びついていると考えられる。また、ほ場による差が大きいのも本病の特徴で、多発後の対策が十分にされた場合は終息するが、無防除や水管理が不足するなど対策が不十分なままでは発生が続くことになる。

その他の病害

糊枯細菌病の発生はここ数年少く経過し、本病による苗立枯も起こっていない。出穂期に好天が続くという気象条件に恵まれていることと、種子生産組合の出穂期防除が確実に実施されていることが発生を少なくしている。

内穎褐変病は多発年と少発年を繰り返し、残暑の続く年に発生が多い傾向にある。本病が収量に影響する度合いは小さいが、酒米栽培では実需者の印象を悪くすることから悩ましい病害といえる。出穂期のオキシリニック酸散布は高い防除効果がある。

縞葉枯病は、ヒメトビウンカの保毒虫率が1%以下の状態が続いていることから、急激な拡大はないものと考えられる。しかし、麦の栽培面積がヒメトビウンカの発生量に影響するため、発生動向に注意が必要である。

長田靖之（農業技セ・病害虫防除部）

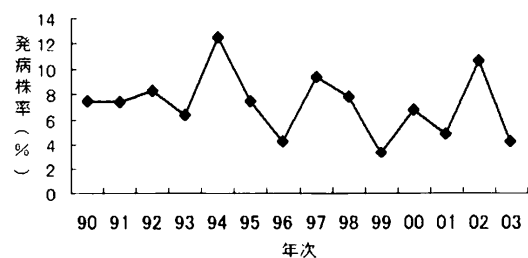


図2 紋枯病発病株率（8月中下旬）